OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ソフィ・カルの映像におけるコミュニケーションの不可能性 : 《ダブル・ブラインド》(1992),《尾行》(1989)を中心に
Author(s)	余, 安里
Citation	デザイン理論. 2004, 44, p. 128-129
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52876
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ソフィ・カルの映像におけるコミュニケーションの不可能性
――《ダブル・ブラインド》(1992),《尾行》(1989) を中心に――

余　安里／京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科機能科学専攻

フランスの現代芸術家であるソフィ・カル(Sophie Calle〈1953－〉)は，1979年から芸術活動を始めて以来，主に写真やビデオ映像といった視覚画像と［擬似］自伝的なテキストを組みあわせて構成された作品を制作している。カルは，その視覚画像とテキストを，美術館やギャラリーでインスタレーションとして展示するだけではなく，出版物や映画，ビデオなどのマス・メディアの領域においても，反復して提示し，作品の発表の場を拡大した精力的な活動を行っている。

また，カルの作品は，その読み取られうる内容と意味において，多層的で重層的な側面を持っており，そのため，様々な視点と切り口による分析と考察を可能にしている。したがって，カルの作品は，美学の領域だけではなく，文学，精神分析，哲学，社会学といった複数の領域から解釈が試みられている。が，それらの解釈は，未だ体系化されず，自由で混沌とした状況にある。

これまでの先行研究の中では，特に，カルの作品を他者への接近や他者との距離，他者との関係をめぐって考察した論文が多く見いだされる。これは，オースティンやデリダによる言語学や哲学上のコミュニケーションの問題との関連をみることもできよう。しかし，ここで議論したい点は，カルの作品におけるコミュニケーションが，私的な領域における他者との日常的な関わりの中に端を発していることである。しかも，カルは，その他者との日常的な関わりを否定し，いわば，コミュニケーションの不可能性の中から，逆説的に生み出されるものを問題にしている。さらにいえば，カルは，写真やビデオの視覚画像（以降，映像とする）を用いることで，哲学や言語学では説明できない，独自のコミュニケーションの不在の状態を提示していくのである。

発表では，カルの2つの作品《ダブル・ブラインド》と《尾行》の具体的な分析を通して，カル独自のコミュニケーションの不可能性が，作品を見る私たちの眼差しと対峙した時に生み出すものを明らかにしようと試みた。《ダブル・ブラインド》はビデオ作品であり，《尾行》は写真作品である。《ダブル・ブラインド》は，1992年にカルが自分の恋人と共同で制作した，プライベートな作品であり，私的な領域におけるコミュニケーションの不可能性として，カルの作品を論じる上で，もっともわかりやすいものだといえる。発表では，この作品の分析の後，《尾行》に遡って分析した。そして，発表の結びに，カルの最も有名な作品《盲目の人々》(1986) をとりあげ，そこに見出される，さらに複雑なコミュニケーションの不可能性に向けて展望した。[《盲目の人々》については，『デザイン理論』(43／2003) に掲載した拙稿「他者とのコミュニケーションの問題――ソフィ・カルの《盲目の人々》を中心に」を参照していただきたい。]

《ダブル・ブラインド》は，カルとその恋人が，1台ずつカメラを持ち，互いに互いを撮影しながら，アメリカ旅行を記録した作品である。彼女たちは，殆ど会話せずに，相手

を観察し合いながら，各々のカメラに思惑を独白するという特殊な撮影方法を行った。ここでは，恋人同士のコミュニケーションのズレが強調されている。また，この作品は，親密な関係にある男女の間に，二重に観察の撮影関係を重ね，他者を観察する自己，他者から観察される自己という，二つの視点から切り取られる自己の姿を同時的に露呈している。

一方《尾行》は，カルが母親に頼んで探偵を雇ってもらい，ある１日の自分の素行を調査させた作品である。これは，３種類の写真（カル自身のポートレート写真，探偵によるカルの写真，第３者による探偵の写真）と２種類のテキスト（探偵の報告書，同日のカルの日記）によって構成される。この作品は，尾行行為のみで成り立つ関係に，一方的な覗きの撮影関係を第３者の眼差しも含めて二重に重ねることによって，複数の視点から多角的に切り取られる同日の自己の姿を構築しているように見える。

ここで，２つの作品が作品の観者の眼差しと対峙した時に，コミュニケーションの不可能性は次ぎのようになった。《ダブル・ブラインド》におけるコミュニケーション不可能性は，観者の眼が第３者の眼差しとしての介入も許さない，個人と個人との激しい拮抗関係を提示している。しかし，この拮抗関係もまた，力の作用としてコミュニケーションのひとつであることを考えると，《尾行》に比べてよりわかりやすい。一方，《尾行》に関しては，もっと根本的な意味でコミュニケーションの不可能性が提示されている。即ち，コミュニケーション自体を支える，伝達媒体（写真とテキスト）の信憑性を解体してみせること（伝達内容の食い違い）で，作品に形成されたコミュニケーションの存在だけでなく，私たちが日々営むコミュニケーションの存在さえもそのいかがわしさに晒されていることを提示する。それこそが，カル自身も意識しなかった，コミュニケーションの不可能性であり，これは，哲学や言語学からでも解釈しえない，この作品独自のものではないだろうか。

そして，さらに新たな発見は，カルの作品毎に異なって現れるコミュニケーションの不可能性が，他者との関係性から構築される自己同一性をも多様に解体することにある。

《ダブル・ブラインド》におけるコミュニケーションの不可能性は，二つの視点から同時に切り取られた自己を分裂してみせている。なぜなら，同時的に見出される二つの自己，即ち他者から見られた自己と他者を見る自己は，決して折り合いが付かない拮抗関係の中で，重なりあうこともなく，ともに自己の姿の本当らしさを主張しあっているからである。

一方，《尾行》におけるコミュニケーション不可能性は，複数の視点から切り取られて多角的に構築されたかに見える一個の自己を解体する。それは，同日の自己の姿を複数の視点によって証明するはずの写真とテキストが，互いにその信憑性を相殺して，構築された自己のいかがわしさを提示するからである。

このように，カルの作品の根底にあると思われるコミュニケーションの不可能性は，日常的なコミュニケーションの失敗や齟齬の状況をただ単に提示するものではなく，日常的なコミュニケーションを支える背景にあって，その先に構築される自己同一性の確かさをもいかがわしいものにするような，根本的な意味でのコミュニケーションの不可能性を提示しようとしているのではないだろうか。